キャリア発達と問題行動

―キャリアレジリエンスと目標指向性とキャリア計画力の視点から―

藤原　実樹・栗原　慎二[1]・石田　弓

Career development and problem behavior in career resilience, goal-directedness, and career planning ability

Miki Fujiwara, Shinji Kurihara and Yumi Ishida

Juvenile delinquents are considered to experience problems in their career development because of their low awareness of careers and roles due to their lack of school education. In this study, we clarified that juveniles with problem behavior, such as delinquency, are immature in their career development and identified factors that affect their problem behavior. In this study, “career resilience,” “goal-directedness,” and “career-planning ability” were considered as index factors for career development. We hypothesized that carrier resilience, goal-directedness, and career-planning ability have a negative effect on problem behavior. A total of 350 junior high school students completed a questionnaire survey and their data were analyzed. A multiple regression analysis (stepwise method) was performed using career resilience, goal-directedness, and career-planning ability as independent variables and tendency of problem behavior as dependent variables. Career planning had a significant negative effect. Among the career planning subscales, metacognition had a significantly negative impact. Considering these results, the ability to think objectively about one’s own career was found to suppress the problem behavior. In only men, in addition to career-planning ability, novelty and diversity in the subscales of career resilience, had a significant negative effect. Considering these results, the ability to accept new and different things about oneself suppressed the problem behavior. However, goal directivity was not possible to obtain the result of the negative effect on the problem behavior.

キーワード : problem behavior，career resilience，goal-directedness，career planning ability

問　題

少年による刑法犯の検挙人員は平成 28 年度で 40,103 人と，近年減少傾向にあるものの，少年の

[1] 広島大学大学院教育学研究科学習開発学講座

人口比は成人の人口比と比較すると約 1.9 倍であり，依然として高い（法務省，2017）。

非行少年への支援は様々に行われているが，中でも就労支援は特に重視されている。法務省（2017）によると，保護観察処分少年，少年院仮退院者共に，無職であった者は，有職又は学生・生徒であった者と比べて，再処分率が顕著に高い。彼らを円滑に社会復帰させるためには，就労を確保し，生活基盤を安定させることが重要であるとされる（法務省，2017）。そのため，少年院入院者・保護観察対象者に対しては，処遇の一環として，ハローワークやコレワーク，その他各種団体・専門家等と協力して就労支援が行われている。

そもそも，少年院入所者の教育程度を見てみると，高校中退及び中学卒業の構成比が高い（法務省，2017）。神垣・川本（2017）は，成人の受刑者の中には，幼少期から不安定な家庭環境下で生育し，健全な職業観や役割意識が育まれず，学齢期には怠学や非行のために十分なキャリア教育を受けることがなく，成人後も不安定な就労状況の中で生活している者が一定数いると述べている。学校教育が不足していることを考えると，成人受刑者に限らず，非行少年も十分にキャリア教育を受けておらず，キャリア発達上に課題を抱えていると考えられる。そこで，本研究では，非行・不良行為などの問題行動を呈する少年のキャリア発達の実態を明らかにし，問題行動に影響を与える要因を見出すこととする。

問題行動とキャリアレジリエンス

キャリア発達のためには，「キャリア形成を脅かすリスクに直面した時，それに対処してキャリア形成を促す働きをする心理特性」（児玉，2015）であるキャリアレジリエンスが必要である。キャリアレジリエンスは，①その保有程度が高いほどキャリア形成の度合いが高くなる，②キャリア形成上のリスク要因によるキャリア形成へのネガティブな影響を，キャリアレジリエンスが減少させる，という 2 つの働きがある（児玉，2015）。また，児玉（2016）は，キャリアレジリンスの問題対応力と未来志向の保有度合いが高いと，心身の変化がリスク要因になりにくいことを示している。

非行少年のキャリア形成が未熟である理由として，彼らがキャリア形成上のリスクに対処できていない可能性がある。よって，キャリアレジリエンスが問題行動の傾向に負の影響を与えていると予想した。

問題行動と目標指向性，キャリア計画力

「キャリア発達課題に取り組もうとする個人の態度的・認知的レディネス」をキャリア成熟と呼ぶ（super，1889; 坂柳，1999）が，この構成要素として「関心性」，「自律性」，「計画性」の三つが挙げられる（坂柳，1999）。関心性とは自己のキャリアに対して積極的な関心を持っているか，自律性とは自己のキャリアへの取り組み姿勢が自律的であるか，計画性とは自己のキャリアに対して将来展望を持ち，計画的であるかを示す。

また，都筑（1982）は，自己の将来への様々な目標・希望（心理学的な未来）は現在の行動を制御し，組織化するような力動的な役割を果たすとしている。つまり，行動を決定する上で，心理学的な未来は大きな役割を持っていると考えられる。さらに，「ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体」のことを時間的展望（都筑，1993）というが，犯罪の加害者は過去と将来に対する時間的展望が乏しいこと（藤岡，2004）や，非行少年は過去・現在・未

来を非連続的に見ている（勝俣・篠原・村上，1982）などの研究がある。勝俣・篠原・村上（1982）は，これを非行少年の具体的な展望の欠如のあらわれであると述べた。

以上のことより，問題行動少年においては，キャリア成熟の構成概念のうち，「自己のキャリアに対して将来展望を持ち，計画的であるか」を示す「計画性」が低いと考えられる。また，キャリア成熟における計画性は，その定義から「自己のキャリアに対し将来展望をもつこと（将来展望）」，「自己のキャリアに対し計画的であること（キャリア計画力）」の二つに分けることができる。よって，将来展望・キャリア計画力それぞれと，問題行動の関係を検討する必要がある。

将来展望について，心理学的未来に対する時間的展望（将来展望）は，希望と目標指向性の二つの側面で捉えられる（白井，1989）。非行少年は具体的な展望に乏しく，楽観的である（勝俣ら，1982）との指摘もあるため，より具体的である目標指向性が問題行動の傾向に負の影響を与えていると予想した。

次に，キャリア計画力についてである。特に中学校段階においては，進路計画の立案と暫定的選択が必要であり（super，1889; 坂柳，1999），社会における自らの役割や将来の生き方・働き方についてしっかりと考えさせるとともに，目標を立てて計画的に取り組む態度の育成等について理解を深めさせることが大切である(文部科学省，2011)。先に述べたように，キャリア計画力が高いと自分の理想とする将来に向けた行動ができるため，計画を崩しかねない問題行動を避けることができる可能性がある。つまり，キャリア計画力が問題行動の傾向に負の影響を与えていると予想した。

ここで，キャリア計画力の側面について考える必要がある。キャリア計画力とは「自己のキャリアに対し計画的であること」である。キャリアの成熟は人生キャリア，職業キャリア，余暇キャリアの 3 つの側面におけるキャリアの成熟を指す（坂柳，1999）が，前述のように，キャリアの中学校段階においては進路計画の立案と暫定的選択が必要である（super，1889; 坂柳，1999）。このことより，キャリア計画力においても，特に「進路」についての側面を考える必要がある。自分の進路を考え，目標と計画を立てて実行することが，キャリア計画力の一部であると考えられる。

また，キャリアについて計画を立てることを考えると，選択の際に情報を集めたり比較したりする能力が必要である（富永，2010）という。つまり，キャリア計画力には「情報選択」の側面も考えられる。

さらに，キャリアとは広く「生涯の中で様々な役割を果たす過程で，自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出していく連なりや積み重ね」を意味する（中央教育審議会，2011）ことを考えると，進路以外にも人生に対してのキャリア計画力を考える必要がある。よい人生・生き方のためには，目標設定・達成のスキル（春木，2009）や，見通しを持った金銭のやりくりのスキル（人見・赤塚，2008）が必要であるとされる。そのためキャリア計画力については，「目標達成」と「お金」の側面についても検討する必要がある。

以上のことより，本研究においては，キャリア計画力を「進路」，「情報選択」，「目標達成」，「お金」の 4 つの側面についての計画力であると定義する。その上で仮説を以下のようにまとめ，検証していくこととした。

（1）キャリアレジリエンスが高いと問題行動の傾向は低くなる。

（2）目標指向性が高いと問題行動の傾向は低くなる。

（3）キャリア計画力が高いと問題行動の傾向は低くなる。

なお，実際に非行少年を対象に調査することは難しいが，中学生の検挙・補導人員が最も多く（警視庁，2018），また非行は初発型のものから重大な非行や犯罪に深化する（緑川，1999）という指摘もあるため，本研究においては，中学生における「学校をさぼること」，「タバコを吸うこと」などの問題行動を非行として扱うこととした。

方　法

調査対象　A 県の公立中学校 2 校，B 県の公立中学校 3 校の全 5 校で，1～3 年生を対象とした。分析対象は，回収したデータ 365 人分のうち，回答内容に不備のあったものを除く 350 人分（男子 189 人，女子 161 人）とした。

調査手続き　2018 年 11 月～12 月にかけて質問紙調査を行った。質問紙を配布・郵送し，無作為に抽出したクラスで，学級担任の指導のもと集団での調査を依頼した。生徒のプライバシーに配慮して回答は無記名で実施した。

調査内容

（1）フェイスシート（学年，性別）

（2）問題行動傾向（6 項目）

中学生に実施するため，実際に問題行動をしているかを尋ねるのは難しい。秦（1984）によると，非行･問題行動を経験したことのある生徒は，その行為に否定的な意見を持つものがかなり少ない。よって，本研究においては秦（2000），小保方・無藤（2005），松井・中村・堀内・石井（2005），西野・氏家・二宮・五十嵐・井上・山本（2009），福田（2008），豊田・下田（2012）を参考に，「学校をさぼること」，「タバコを吸うこと」，「子どもだけで夜遅くまで遊ぶこと」，「人の自転車を勝手に使うこと」，「万引きをすること」，「隠れてお酒を飲むこと」の 6 つの問題行動について，どれだけいけないことと考えるかを問う項目を作成した。「絶対に良くない」という項目（逆転項目では「するひとの気持ちもわかる」）に対して，「非常によくあてはまる」（5 点）から「全くあてはまらない」（1 点）の 5 段階評定で回答を求めた。分析の際は，問題行動の高低で判断するためにすべての項目を逆転項目として扱い，「非常によくあてはまる」（1 点）から「全くあてはまらない」（5 点）となるようにした。

（3）キャリアレジリエンス（17 項目）

児玉（2015，2017）のキャリアレジリエンス尺度（成人用，大学生用）をもとに，項目を中学生向けに言葉を書き換えて使用した。「非常によくあてはまる」（5 点）から「全くあてはまらない」（1 点）の 5 段階評定で回答を求めた。

（4）目標指向性（5 項目）

白井（1994）の作成した時間的展望体験尺度の下位尺度「目標指向性」の 5 項目を使用した。キャリアレジリエンスと同様に 5 段階評定で回答を求めた。

（5）キャリア計画力（10 項目）

仮説において述べたように，キャリア計画力を「進路」，「情報選択」，「目標達成」，「お金」の 4 つの側面から測定できるよう，春木（2009），坂柳（2016），島本・石井（2006），原岡（1990）などをもとに，10 項目を作成した。キャリアレジリエンスと同様に 5 段階評定で回答を求めた。

結　果

因子分析の結果

（1）問題行動傾向

分析対象である 350 人分のデータについて，因子分解（主因子法・プロマックス回転）を行った。天井効果が出たもののうち，分散が.60 以下であった「万引きは絶対に良くない」の質問項目を削除し，また因子負荷量が.35 未満であった「隠れてお酒を飲む人の気持ちもわかる」の項目を削除した。その結果，項目数が 4 項目となったため，問題行動傾向を 1 因子とした。Cronbach の α 係数を算出したところ，α=.85 であり，信頼性が確認された。

（2）キャリアレジリエンス

キャリアレジリエンスの尺度開発において，児玉（2015，2017）は 5 因子モデルを採択しており，信頼性・妥当性ともに十分に認められた尺度である。しかし，本研究では小・中学生用に書き換えたものを使用したため，α 係数の算出を行った。その結果，第 1 因子である問題対応力は α ＝.90，第 2 因子であるソーシャルスキルは α ＝.93，第 3 因子である新奇・多様性で α ＝.95，第 5 因子である援助志向で α ＝.96 と，ほぼ満足しうる結果が得られた。第 4 因子である未来志向では α ＝.65 であったが，使用に耐えられるものであると判断したため，そのまま用いることとした。

（3）目標指向性

本研究においては，時間的展望尺度の下位尺度である目標指向性のみを使用した。時間的展望体験尺度は，白井（1994）の尺度開発により，目標指向性の α 係数は α ＝.79，再テスト信頼性も.84 と，信頼性が十分に認められている。そのため，本研究においてはそのまま用いることとした。

（4）キャリア計画力

分析対象である 350 人分のデータについて，因子分解（主因子法・プロマックス回転）を行った。その結果，共通性が確認され，全ての項目が削除されることなく採用され，3 因子が抽出された。第 1 因子は，「自分で決めた計画に沿って，実際に物事を実行することができる」，「多くの情報をもとに，自分の考えをまとめることができる」，「先を見越して計画を立てることができる」，「目標を決めるときには，それをいつまでにやりとげるかを決める」の 4 項目である。これは，計画を立てるときに必要な力であるため，『計画力』と命名した（α ＝.86）。第 2 因子は，「買いたいものがあるときには，それが本当に必要かどうか考える」，「何かをしたあとには，自分のした方法がよかったかどうかについてふりかえる」，「進路について決めるときには，実際に自分にできることかどうかを考える」，「自分の進路について考えるときに，親や先生の話を参考にする」の 4 項目である。これは，見通しを持って冷静に判断することが必要なため，『メタ認知』と命名した（α ＝.77）。第 3 因子は，「お小遣いなどのお金を計画的に使うことが苦手である」，「やるべきことをテキパキと片付けることが苦手である」の 2 項目である。これは，実際に決めたことを行動に移す項目であるた

Table 1　キャリア計画力の因子分析の結果

	因子負荷量		
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ　計画力（α＝.86）			
自分で決めた計画に沿って，実際に物事を実行することができる	**1.029**	-0.131	0.064
多くの情報をもとに，自分の考えをまとめることができる	**0.589**	0.226	-0.038
先を見越して計画を立てることができる	**0.503**	0.327	0.069
目標を決めるときには，それをいつまでにやりとげるかを決める	**0.412**	0.294	-0.091
Ⅱ　メタ認知（α＝.77）			
買いたいものがあるときは，それが本当に必要かどうか考える	-0.01	**0.843**	0.171
何かをしたあとには，自分のした方法がよかったかどうかについてふりかえる	0.003	**0.754**	-0.024
進路について決めるときには，実際に自分にできることかどうかを考える	0.247	**0.436**	-0.101
自分の進路について考えるときに，親や先生の話を参考にする	0.094	**0.392**	-0.262
Ⅲ　実行力（α＝.72）			
お小遣いなどのお金を計画的に使うことが苦手である	-0.019	0.042	**0.769**
やるべきことをテキパキと片付けることが苦手である	0.059	0.032	**0.767**
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ	—	0.773	-0.336
Ⅱ		—	-0.451
Ⅲ			—

め，『実行力』と命名した（α＝.72）。以上の結果を Table1 に示した。

重回帰分析の結果

全体における仮説の検証

（1）仮説の検証

これらの因子をもとに，本研究の 3 つの仮説を検討するために，問題行動傾向を従属変数，キャリアレジリエンス，目標指向性，キャリア計画力を独立変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。その結果，キャリア計画力が有意な負の影響を与えており（β＝-.46，p＜.001），キャリアレジリエンスと目標指向性がそれぞれ有意な正の影響を与えていた（β＝.29，p<.001；β＝.10，p<.05）。また，相関を見ると，キャリアレジリエンスと目標指向性の間で.12 の有意な正の相関（p<.05），目標指向性とキャリア計画力の間で.44 の有意な正の相関（p<.001），キャリアレジリエンスとキャリア計画力の間で-.14 の有意な負の相関（p<.01）を示した。

（2）キャリア計画力の下位尺度が与える影響の検証

また，負の相関を示したキャリア計画力についてさらに詳しく見るために，問題行動傾向を従属変数，キャリア計画力の下位尺度「計画力」，「メタ認知」，「実行力」を独立変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。その結果，メタ認知が有意な負の影響を与えており（β＝-.53，p<.001），実行力が有意な正の影響を与えていた（β＝.14，p<.01）。計画力は，問題行動傾向に対し直接の有意な影響を与えていなかった。さらに，相関を見たところ，計画力とメタ認知の間で.74 の有意な正の相関（p<.001），メタ認知と実行力の間で-.32 の有意な負の影響（p<.001），計画力と実行力の間で-.24 の有意な負の相関（p<.001）を示した。

さらに，性別による違いを見るために，男女別の検討を行った。

男子における仮説の検証

（1）仮説の検証

まず，問題行動傾向を従属変数，キャリアレジリエンス，目標指向性，キャリア計画力を独立変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。その結果，キャリアレジリエンスとキャリア計画力が有意な負の影響（β＝-.18，p<.01；β＝-.21，p<.01），目標指向性が有意な正の影響（β＝.23，p<.001）を与えていた。また，相関を見たところ，キャリアレジリエンスと目標指向性の間で.46 の有意な正の相関（p<.001），目標指向性とキャリア計画力の間で.40 の有意な正の相関（p<.001），キャリアレジリエンスとキャリア計画力の間で.56 の有意な正の相関を示した。

（2）キャリアレジリエンスの下位尺度が与える影響の検証

問題行動傾向に対し有意な負の影響を与えていたキャリアレジリエンスについて，その各下位尺度が与える影響をさらに詳しく見るために，問題行動を従属変数，キャリアレジリエンスの下位尺度「問題対応力」,「ソーシャルスキル」,「新奇・多様性」,「未来志向」,「援助志向」を独立変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。その結果，新奇・多様性のみ有意な負の影響（β＝-.26，p<.001）を与えていた。問題対応力，援助志向，ソーシャルスキル，未来志向は有意な影響を与えていなかった。また，相関を見たところ，問題対応力とソーシャルスキル，新奇・多様性，未来志向，援助志向との間でそれぞれ.72, .60, .44, .49 の有意な正の相関が見られた（すべて p<.001）。また，ソーシャルスキルと新奇・多様性，未来志向，援助志向との間で.47，.47，.44 の有意な正の相関が見られた（すべて p<.001）。さらに，新奇・多様性と未来志向，援助志向の間では.39，.54，未来志向と援助志向の間では.52 の有意な正の相関が見られた（すべて p<.001）。

（3）キャリア計画力の下位尺度が与える影響の検証

また，負の相関を示したキャリア計画力についてさらに詳しく見るために，問題行動傾向を従属変数，キャリア計画力の下位尺度「計画力」,「メタ認知」,「実行力」を独立変数とする重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。その結果，メタ認知が有意な負の影響（β＝-.29，p<.001）を与えていた。計画力，実行力は有意な影響を与えていなかった。また，相関を見たところ，計画力とメタ認知の間で.57 の有意な正の相関，メタ認知と実行力の間で.28 の有意な正の相関，計画力と実行力の間で.44 の有意な正の相関が見られた（すべて p<.001）。

女子における仮説の検証

（1）仮説の検証

まず，問題行動傾向を従属変数，キャリアレジリエンス，目標指向性，キャリア計画力を独立変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。その結果，キャリア計画力が有意な負の影響（β＝-.37，p<.001）を与えていた。キャリアレジリエンスと目標指向性は有意な影響を与えていなかった。また，相関を見たところ，キャリアレジリエンスと目標指向性の間で.50 の有意な正の相関（p<.001），目標指向性とキャリア計画力の間で.45 の有意な正の相関（p<.001），キャリアレジリエンスとキャリア計画力の間で.65 の有意な正の相関（p<.001）を示した。

（2）キャリア計画力の下位尺度が与える影響の検証

また，負の相関を示したキャリア計画力についてさらに詳しく見るために，問題行動傾向を従属変数，キャリア計画力の下位尺度「計画力」「メタ認知」「実行力」を独立変数とする重回帰分析（ス

テップワイズ法）を行った。その結果，メタ認知が有意な負の影響（β＝-.42，p<.001）を与えていた。計画力，実行力は有意な影響を与えていなかった。また，相関を見たところ，計画力とメタ認知の間で.50 の有意な正の相関（p<.001），メタ認知と実行力の間で.19 の有意な正の相関（p<.05），計画力と実行力の間で.39 の有意な正の相関（p<.001）が見られた。

考　察

キャリアレジリエンスが問題行動に与える影響

仮説（1）「キャリアレジリエンスが高いと問題行動の傾向は低くなる」については，全体では仮説を支持する結果を得ることができなかった。しかし，男子では-.18 と負の影響を与えており，男子においてはキャリアレジリエンスが問題行動に負の影響を与えていると考えられる。男子におけるキャリアレジリエンスの各下位尺度「問題対応力」，「ソーシャルスキル」，「新奇・多様性」，「未来志向」，「援助志向」が問題行動傾向に与える影響を見たとき，新奇・多様性が有意な負の影響を与えていた。これは，新奇・多様性が高いと，新しいことや自分と違うことを受け入れることができ，不適応を起こしにくく，問題行動に走る可能性が低くなるためであると考えられる。

また，男女別に見たとき，キャリアレジリエンスとキャリア計画は，男子で.56，女子で.65 と有意な正の相関を示しており，キャリアレジリエンスが高まることでキャリア計画力も高まり，その結果，問題行動傾向に負の影響を与えていると考えられる。キャリア形成上のリスクに対処ができると，将来を考える余裕ができ，計画を立てて問題行動を避けることができる可能性があると考えられる。

以上のことより，キャリアレジリエンスについては，その下位尺度によっては問題行動傾向に対して負の影響を与えるものもある。特に男子においては，新奇・多様性をメインに，キャリアレジリエンスの向上を図ることにより，問題行動の予防につなげることができると考えられる。キャリア教育は学校教育において重視されており，キャリア教育において育成すべき基礎的・汎用的能力として①人間関係形成・社会形成能力②自己理解・自己管理能力③課題対応能力④キャリアプランニング能力が挙げられている（中央教育審議会，2011）。なかでも人間関係形成・社会形成能力には多様な他者の考えや立場を理解する力が含まれており，新奇・多様性にも影響を与えると考えられる。具体的には，コミュニケーション・スキル，チームワーク，リーダーシップ等（中央教育審議会，2011）を育成することが必要であると考えられる。

目標指向性が問題行動に与える影響

仮説（2）「目標指向性が高いと問題行動の傾向は低くなる」については，仮説を支持する結果を得ることができなかった。中川（2007）によると，軽微な違法行為は重大な犯罪に比べて発覚可能性や公的制裁も小さく，それらに関与しても，少年が目標達成のために必要とする社会的資源の獲得を阻害する要因となりにくいため，時間的展望による軽微な非行・不良行為に及ぼす影響がみられない可能性がある。本研究においても，扱った問題行動が違法に当たらないものや比較的軽微なものが多く，目標指向性による影響が得られなかった可能性がある。問題行動を重く設定するなど，今後さらに検討していく必要がある。

しかし，目標指向性はキャリア計画力と有意な正の相関を示しており，キャリア計画力を媒介して問題行動傾向に負の影響を与えている可能性がある。これは，目標がきちんと立てられると，達成のためにどのようなことをすべきか考えることができ，同時に達成を阻害する問題行動を避けるようになるためであると考えられる。キャリア計画力を生かすために，目標指向性は不可欠なものであると言える。キャリア計画力が問題行動傾向に与える影響はとても大きいため，目標指向性の向上を図ることでキャリア計画力を高め，問題行動の予防につなげることができると考えられる。目標指向性は，生活習慣（新保・仲村・吹越・赤松，2014）や進路選択に対する自己効力感（山本・岩元・原口，2012）との関連が指摘されており，これらに働きかけることで，目標指向性を向上させることが出来ると考えられる。

キャリア計画力が問題行動に与える影響

仮説（3）「キャリア計画力が高いと問題行動の傾向は低くなる」については，キャリア計画力は問題行動傾向に有意な負の影響（β=-.46）を与えており，仮説を支持する結果を得ることができた。

また，キャリア計画力の各下位因子「計画力」，「メタ認知」，「実行力」が問題行動傾向に与える影響を見ると，メタ認知が大きな負の影響（β=-.53）を与えていた。これは，物事を為す際に先のことを考えたり，自分のことを客観的に考えたりすることができると，問題行動に対しても冷静に考えてそのデメリットを判断することで，抑制力を発揮することができるためであると考えられる。

一方で，実行力は問題行動傾向に正の影響（β＝.14）を与えていた。行動力が高すぎると，考える前に問題行動を起こしてしまう可能性があると考えられる。

また，全体において，計画力がメタ認知と正の相関を示していた。そのため，計画力はメタ認知を媒介にして，問題行動傾向に対し負の影響を与えていると考えられる。将来のために計画する力は，問題行動そのものに対してはあまり影響を与えないが，計画することでより冷静に物事を考えることができるようになると考えられる。

以上のことより，キャリア計画力の向上を図ることで，問題行動の予防につなげることができると考えられる。キャリア計画力は，キャリア教育において育成すべき基礎的・汎用的能力のうち④キャリアプランニング能力にあたり，学ぶこと・働くことの意義や役割の理解（中央教育審議会，2011）が必要であると考える。

今後の課題

本研究ではキャリアレジリエンスやキャリア計画力の必要性が示された一方で，目標指向性については問題行動との直接の負の関連がみられなかった。これについては，問題行動の設定や仮説の練り直しの必要があるといえる。また，本研究ではキャリア発達の指標としてキャリアレジリエンスや目標指向性，キャリア計画力を検討したが，キャリア発達においてはこの他にも様々な要素が存在する。そのため，他の要因についても検討する必要がある。

なお，本研究ではキャリア計画力について「進路」，「情報選択」，「目標達成」，「お金」の 4 つの側面を取り入れた独自の尺度を作成した。これらの側面に関する計画力の重要性は明らかになったものの，キャリアとは広く「生涯の中で様々な役割を果たす過程で，自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出していく連なりや積み重ね」を意味する（中央教育審議会，2011）ため，この尺

度がキャリアに関する計画力の一部分しか測定できていないことも考えられる。そのため，キャリア計画力の測定尺度については，今後さらに検討が必要であると言える。

引用文献

藤岡淳子(2004).　被害者と加害者をめぐる断片化と統合　法社会学　134-237

福田舞(2008).　現代青少年の逸脱行動と背景要因の検討――時間的展望に着目して――　人間文化創成科学論集，11，329-337

原岡一馬(1990).　お金に対する態度と価値志向 I ――態度の構造と態度尺度の構成――　名古屋大学教育学部紀要　教育心理学科，37，199-216

春木敏(2009).　児童を対象とするライフスキル形成に基礎を置く食生活教育プログラムの開発と評価に関する研究　栄養学雑誌，67，4，178-185

秦政春(1984).　現代の非行・問題行動と学校教育病理　教育社会学研究，39，59-76

秦政春(2000).　子どもたちの規範意識と非行･問題行動　大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 26, 123-155

人見佳代子・赤塚朋子(2008).　キャリア教育の視点を取り入れた小学校家庭科構想　宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要，31，97-104

法務省(2014).　宣言：犯罪に戻らない・戻さない～立ち直りをみんなで支える明るい社会へ～

法務省(2017).　平成 29 年版犯罪白書

神垣一規･川本喜久子(2017).　男子受刑者が有するキャリア発達上の課題――就労安定性とその背景要因との関係に注目して――　キャリア教育研究，35，37-46

勝俣暎史･篠原弘章･村上みどり(1982).　非行少年の時間的展望―少年鑑別所風幼少年の場合―　熊本大学教育学部紀要人文科学，31，267-277

警視庁(2018).　平成 29 年中少年育成活動の概況

児玉真樹子(2015).　キャリアレジリエンスの構成概念の検討と測定尺度の開発　心理学研究, 86, 2, 150-159

児玉真樹子(2016).　心身の変化によるリスク経験時のキャリアレジリエンスの働き――職業的アイデンティティに着目して――　日本教育心理学会第 58 回大会総会発表論文集，553

児玉真樹子(2017).　大学生用キャリアレジリエンス測定尺度の開発　学習開発学研究，10，15-23

松井洋・中村真・堀内勝夫・石井隆之(2005).　非行的態度の抑制要因に関する研究　河村学園女子大学研究紀要，16，1，27-44

緑川徹(1999).　初発型非行――豊かさが生み出す浮遊非行――　清永賢二(編)　少年非行の世界（pp.37-65）　有斐閣

文部科学省(2011).　中学校キャリア教育の手引き

西野泰代・氏家達夫・二宮克美・五十嵐敦・井上裕光・山本ちか(2009).　中学生の逸脱行為の深化に関する縦断的検討　心理学研究，80，1，17-24

小保方晶子・無藤隆(2005).　親子関係・友人関係・セルフコントロールから検討した中学生の非行

傾向行為の規定要因および抑止要因　発達心理学研究，16，３，286-299
坂柳恒夫(1999).　成人キャリア成熟尺度(ACMS).の信頼性と妥当性の検討　愛知教育大学研究報告，48(教育科学編)，115-122
坂柳恒夫(2016).　小・中学生の生き抜く力に関する研究――キャリアレジリエンス態度・能力尺度(CRACS)の信頼性と妥当性の検討――　愛知教育大学研究報告，65(教育科学編)，85-97
島本好平・石井源信(2006).　大学生における日常生活スキル尺度の開発　教育心理学研究，54，211-221
新保みさ・仲村絵里・吹越悠子・赤松利恵(2014).　勤労者における目標指向性の高い者の生活習慣　栄養学雑誌　72，5，243-250
白井利明(1989).　現代青年の時間的展望の構造(１)――大学生と専門学校生を対象に――　大阪教育大学紀要　第Ⅳ部門，38，1，21-28
白井利明(1994).　時間的展望体験尺度の作成に関する研究　心理学研究，65，１，54-60
富永美佐子（2010），高校生の進路選択の構造――進路選択能力，進路選択自己効力，進路選択行動の関連――　キャリア教育研究，28，35-45
豊田あやこ・下田芳幸(2012).　中学生における非行傾向行為及び初発型非行に関する研究　人間発達科学部紀要，7，1，117-127
都筑学(1982).　時間的展望に関する文献的研究　教育心理学研究，30，1，73-86
都筑学(1993).　大学生における自我同一性と時間的展望　教育心理学研究，41，１，40-48
中央教育審議会答申(2011).　今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について
山本登・岩元澄子・原口雅浩(2012).　青年期における未来展望と進路選択に対する自己効力感および一般性自己効力感との関連　久留米大学心理学研究，11，102-107